

1 小学校入学前の子どもの学びとは

幼児期の生活のほとんどは、遊びによって占められています。子どもは遊びを中心として、頭も心も体も動かして様々な対象と直接関わりながら、総合的に学んでいます。

(1) 幼児教育と子どもの学び

幼稚園の遊びの一場面

子どもたちがものを転がす遊びに集中しています。
子どもたちは、この遊びを通して何を学んでいるのでしょうか。

子どもの姿や言葉

子どもの学び

○「これを上に持ち上げて、
ここから転がしたいんだ」

* やりたいことに
向かって心と体が働く

○「どうすれば、
うまくいかな」

* 工夫したり、
試したりする

○「そうか、こうす
ればいいんだ！」

* 物の性質や仕
組みに気付く

○「ぼくが押さえるか
ら、そっと転がして」

* 言葉のやり取りで互
いの思いを共有する

○「もっと早く転が
らないかな」

* 新しい考え
を生み出す

○「やった、成
功だ！！」

* 共通の目的
を達成する

子どもは、遊びに集中していく中で、ものによって転がり方に違いがあることに気付いたり、樋(とい)の斜度を変えながら試行錯誤する楽しさを味わったりします。また、友達と一緒に遊ぶ中で、人と関わるよさを感じたり、対立した意見を調整していく大切さを学んだりします。遊びは幼児期特有の学びのスタイルと言えます。

このように、一つの遊びを展開する中で、子どもはいろいろな経験をし、様々な資質・能力を身に付けます。

幼児教育の基本は、「環境を通して行う教育」です。この「環境を通して行う教育」とは、子どもが自ら進んで動き出したいくなるような学習環境の設定に基づく教育です。

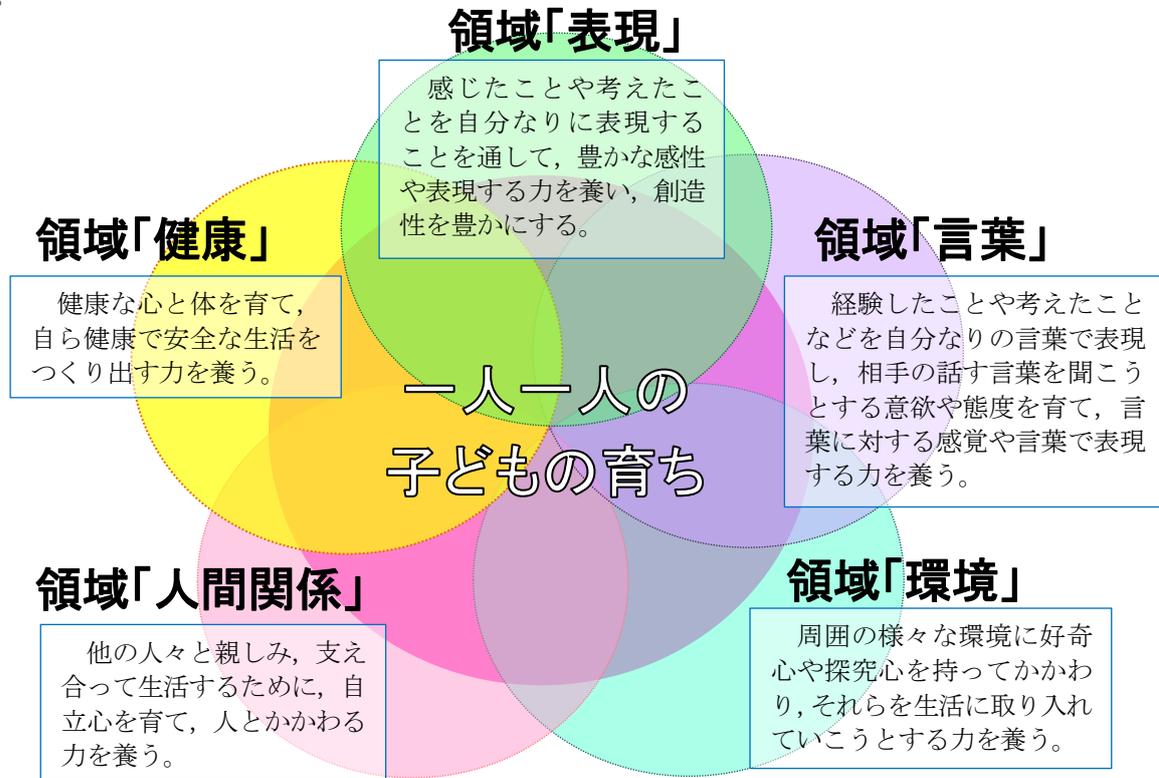
写真の例でいうと、教師はねらいを持って転がりやすいものや樋といった子どもが遊びたいくなるような環境を設定し、子どもがその環境に自ら関わって遊ぶことを通して、育てたい子どもの姿に近づくことを期待します。

幼児教育の教育方法は、ねらいを学習環境に反映させることによって、子どもの主体的な活動を誘発しようとする教育方法です。

(2) 幼児教育における5領域

幼稚園教育要領等では、卒園までに育つことが期待される心情、意欲、態度である「ねらい」とそのねらいを達成するために指導する事項である「内容」が、幼児の発達の側面からまとめて5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）に編成されています。

幼児期の子どもたちは、5領域の内容を総合的に身に付け、学びの芽生えを持って小学校へ入学してきます。



※図中の文言は幼稚園教育要領から抜粋

(3) 幼児教育から小学校以降の教育へ

幼児教育の目標は「～しようとする」のように、子どもの育ちの方向性を重視するのに対し、小学校以降の教育は、「～ができる」といった具体的な目標への到達を重視します。これは、幼児教育が幼児の生活や経験を重視する経験カリキュラムに基づき展開されるのに対し、小学校以降の教育が学問体系の獲得を重視する教科カリキュラムを中心に展開されるからです。

幼児教育	小学校以降の教育	
経験カリキュラム ○方向目標 「～しようとする」 ○環境を通して幼児の自発的な活動を導く指導 ○個人内評価を重視	幼児教育と 小学校以降の教育を つなぐ スタート カリキュラム	教科カリキュラム ○到達目標 「～ができる」 ○教科書等の教材を活用した系統的な指導 ○目標準拠評価

このように、遊びを中心に総合的に学ぶ幼児教育と各教科等を中心に系統的に学ぶ小学校以降の教育には、大きな違いがあります。

そこで、小学校に入学した子どもが、これまでの学びや育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、学ぶことができるようにするためのスタートカリキュラムが必要となるのです。

2 幼児教育の成果を生かすスタートカリキュラム

(1) スタートカリキュラムとは

幼児期の子どもたちは遊びながら様々な資質・能力を身に付け、小学校以降には教科学習を中心として学ぶことにより様々な資質・能力を身に付けます。遊びを通した学びと教科学習を通した学びをつなぐのが生活科であり、小学校入学当初における生活科を中心としたカリキュラムがスタートカリキュラムです。

「小学校学習指導要領解説 生活編」では以下のように記述されています。

第4章 指導計画の作成と内容の取扱い (p43～p45)

1 指導計画作成上の配慮事項

(3) 国語科、音楽科、図画工作科など他教科との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。

例えば、4月の最初の単元では、学校を探検する生活科の学習活動を中核として、国語科、音楽科、図画工作科などの内容を合科的に扱い大きな単元を構成することが考えられる。こうした単元では、児童が自らの思いや願いの実現に向けた活動を、ゆったりとした時間の中で進めていくことが可能となる。大単元から徐々に各教科に分化していくスタートカリキュラムの編成なども効果的である。(p45)

「栃木県教育振興基本計画 2020—教育ビジョンとちぎ—」では、スタートカリキュラムを「小学校に入学した児童が、幼児期の遊びや生活を通した学びや育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、学ぶことができるようにするための、生活科を中心とした合科的なカリキュラム」と説明しています。

スタートカリキュラムは、幼児教育の遊びの要素と小学校教育の教科学習の要素の両方を組み合わせた合科的・関連的なカリキュラムです。

入学当初の生活科を中心とした合科的な指導は、子どもの「明日も学校に来たい」という意欲をかき立て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらし、新入生の小学校へのスムーズな「適応」を促すことが期待されます。

(2) 生活科を中心とした合科的な指導

生活科を中心とした合科的な指導とは、大きな単元の目標（子どもを育てる方向性）を定め、遊びの要素の強い活動や教科にも連動するような活動を取り入れることです。

例) 単元名 「がっこう だいすき」

目標（子どもを育てる方向性）「学校が大好きになり、明日も学校に来たいと思える子どもを育てる」

合科的な指導 1



活動 学校探検（生活）＋ 本に親しもう（国語）

内容 生活科の学校探検で校内を探検する中で、図書室では多くの子どもが様々な本に興味を示すことが予想される。そこで図書室を探検した際には自由に本を読む時間を取ったり絵本を読み聞かせたりして、子どもの興味に即した活動を行う。

合科的な指導 2



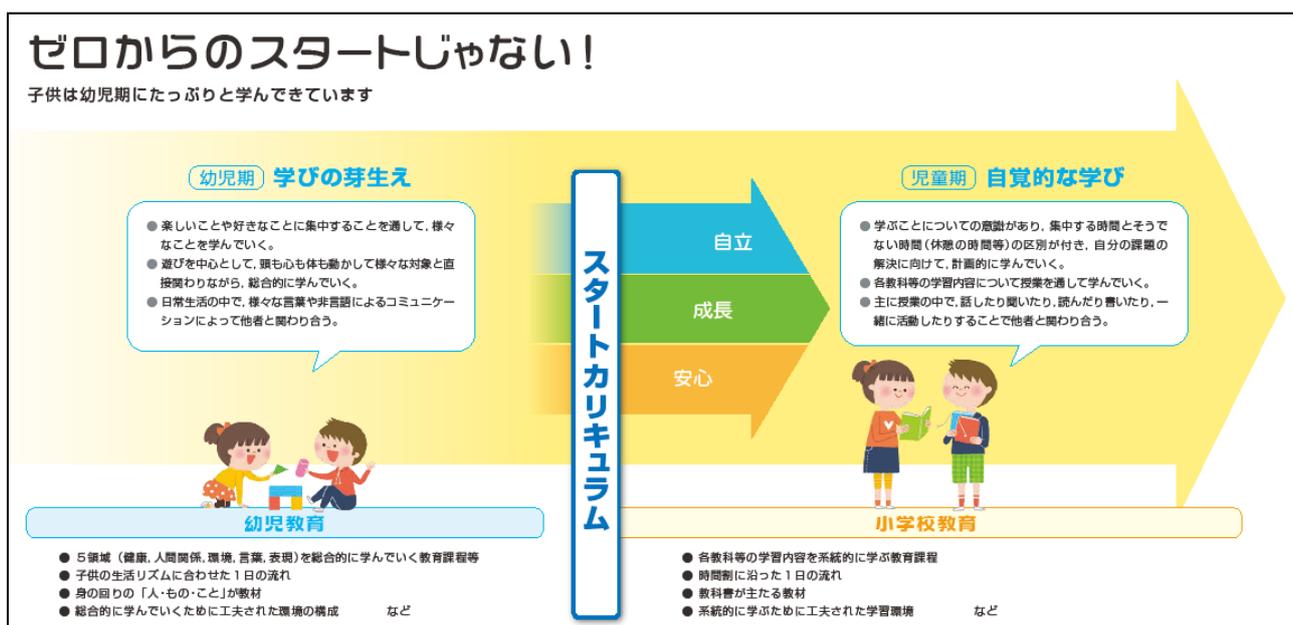
活動 学校探検（生活）＋ 好きな場所を紹介しよう（図画工作）

内容 生活科で探検した場所の中には初めて目にしたものや驚いたことなどがあり、それを誰かに伝えたいという思いをもつことが予想される。そこで印象に残った場所を絵に描き、友達などに紹介する活動を行う。

(3) 「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へ

小学校1年生は「ゼロからのスタートじゃない!」という考えに立つかどうかで、スタートカリキュラムのつくり方や実践は大きく変わります。

実際、子どもは幼児期に多くのことを学んできていますが、その姿は小学校からは見えにくいものです。小学校の中では最年少であり、環境の変化などから不安を感じている1年生の姿を見ると、「ゼロから丁寧に教えなくては」という気持ちになりがちです。しかし、ゼロからのスタートではありません。



「スタートカリキュラムスタートブック」(文部科学省 国立教育政策研究所 平成27年1月)

遊びや生活を通して総合的に学んでいく幼児期の教育課程と、各教科等の学習内容を系統的に配列した児童期の教育課程は、内容や進め方が大きく異なります。

そこで、入学当初は、幼児期の学び方と児童期の学び方を行きつ戻りつしながら、幼児期の豊かな学びと育ちを基礎として、子どもが主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的につくることが求められます。それがスタートカリキュラムであり、幼児期の「学びの芽生え」から児童期の「自覚的な学び」をつなぐ重要な役割を担っているとと言えます。



これから本格的にスタートカリキュラムを編成する場合、各学校に配布されている「スタートカリキュラムスタートブック」(文部科学省 国立教育政策研究所 平成27年1月)を参考にしてください。
([http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidouiryuu.html](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidouairyuu.html))

3 スタートカリキュラム編成・実施のポイント

各学校にあるスタートカリキュラムを、幼児教育の成果を生かし子どもの学びや育ちをつなぐスタートカリキュラムとするために、「安心」、「成長」、「自立」の三つのポイントで見直してみましょう。

安心

子どもの「できる」を生かしていますか？

入学した子どもは、新しい環境の中で初めて出会う人や場所等に戸惑うこともあり、入学当初の指導が「トイレの使い方」や「正しい座り方」等の「できない」を前提にした適応指導になりがちです。

その前に、幼稚園等で親しんできた遊びや分かりやすい環境を用意して、これまでに育まれた「できる」を生かして、「幼稚園と一緒に！」、「友達ができた！」という“安心”を生み出すものにしましょう。

例えば、入学式翌日の1校時の活動を・・・

【ねらい】 集団生活のきまりを知り、学校のきまりを身に付ける。

○活動 ・ トイレの使い方 ・ 廊下の歩き方 等の説明



その前に

【ねらい】 幼児期の遊びを行い、気持ちをほぐして生活する。

○活動 ・ みんなで歌おう ・ 手遊び ・ 読み聞かせ



成長

「学び」をつなぐものですか？

一つの小学校には、複数の幼稚園等から経験の異なる子どもたちが入学してきます。集団生活を送るために、「始めにきまりありき」の指導になりがちです。

幼稚園等では、遊びや生活の中で様々な「学びの芽」を育みます。子どもが必要感に基づいて自主的に取り組もうとする「学びの芽」を生かした活動や、幼児期の経験を生かして、自分たちでルールややり方を考える「学びの場」を大切に、「成長」を促すようにしましょう。

◎子どもの自主性を大切にする

例えば、係を決めるとき

先生「今日は、係を決めます。窓係は2人、
黒板係は・・・」

生活の中の子どもの姿をきっかけに



先生「太郎さんが、窓を開けてくれたのね。
朝の空気は気持ちがいいね。」

◎これまでの経験を生かす

例えば、給食が始まる時

先生「台ふきは、由紀さんね。やり方は、
まず・・・」

幼児期の経験を聞きながら

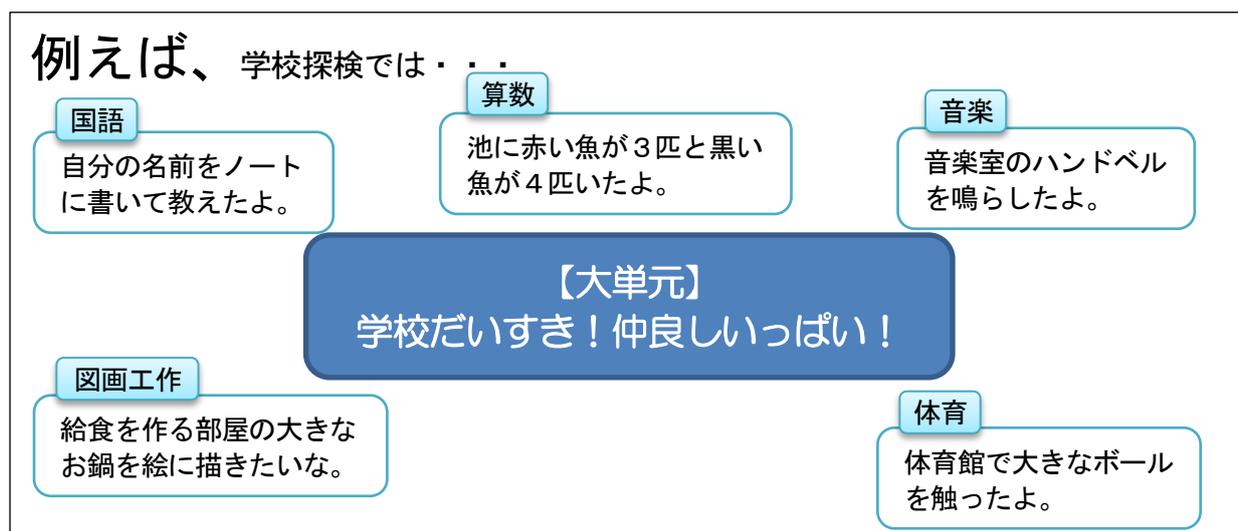


先生「幼稚園や保育所では、どうやって
いたかな？」

自立

生活科を中心とした合科的なものは何か？

生活科は、幼児期の「遊びの中の学び」と似ていて、入学当初の学習の中に、他教科の学習要素がたくさんあります。どの教科のどのような要素があるか、どのような力が身に付くのかを、教師自身が子どもの目線で考え明確にする必要があります。



生活科の究極の目標は「自立への基礎を養う」ことです。生活科を中心とした合科的な指導を充実させることで、自分で考え判断し行動するなどの態度を育み、“自立”への基礎を養いましょう。



スタートカリキュラムの編成・実施に当たって、気を付けることは何ですか？

スタートカリキュラムの編成に当たって、各学校によって、地域や子どもの状況が異なることから、どのような期間、どのような方法で行うかは、それぞれの学校において判断し、適切に編成されるべきものです。また、実施に当たっては、子どもの実態等に応じて、適宜計画を修正するなど、柔軟性をもたせることも大切なことです。そして、年度末等には、当該年度のスタートカリキュラム全体の評価・改善をし、次年度の編成に生かしていく必要があります。

つまり、編成・実施に当たってはカリキュラム・マネジメントを適切に実施していくことが重要となります。以下そのための留意点を示します。

① 幼児教育について理解していることが前提です。

幼児教育と小学校教育には、保育や教育の目標、方法、評価等において、様々な違いがあります。幼児教育の成果を生かしたスタートカリキュラムの編成には、入学前の子どもが、何のために（目的・ねらい）、どういうことを（活動・経験）、どのように（場・環境・時間）学んできたかを知っていることが必要となります。そのためには、実際に、幼稚園や保育所や認定こども園等の一日の生活の流れや子どもの様子を見たり、幼稚園、保育所、認定こども園等の教職員と合同の研修をしたりするなどして、「子どもの発達のプロセス」や「遊びを通じた学び」について、理解することが望まれます。

② 子ども一人一人の実態に配慮しましょう。

小学校入学前の子どもは、幼稚園、保育所、認定こども園、その他、様々な環境で生活し、一人一人の発達や学びは多様です。子どもの実態を把握し、一人一人に対応したきめ細かい指導が求められます。そのためには、幼稚園、保育所、認定こども園から送付される要録等を活用し、子どもの発達や学びの状況に関する情報を共有することが大切です。

③ 学校全体で共通理解を図ることが大切です。

スタートカリキュラムを実施する際には、学年による合同授業や異学年との交流授業なども想定されることから、その意義等について学校全体で共通理解を図ることが大切です。また、スタートカリキュラムを編成したり、実施後に評価・改善したりする際には、教務主任、1年担任、生活科主任等が組織として取り組むことが望まれます。

④ 入学式等で保護者にも周知し、共に子どもの学びや育ちを支えましょう。

児童の円滑な学校生活への適応を図る上で、保護者による児童への支援が重要であることから、スタートカリキュラムの意義や具体的な指導について保護者に適切に周知することが大切です。

⑤ 近隣の幼稚園、保育所、認定こども園の思いを踏まえて編成したり、情報提供したりしましょう。

幼稚園、保育所、認定こども園等と小学校との間で、相互に連携協力し、子どもの実態や指導の在り方などについて理解を深めるとともに、幼稚園、保育所、認定こども園等における生活や教育の成果を積極的に生かして、スタートカリキュラムを編成することが重要です。また、編成したスタートカリキュラムや子どもの学ぶ様子等を幼稚園、保育所、認定こども園等に知らせることで、さらに連携が深まります。

◇ おわりに

近年、幼児教育と小学校教育の連携の重要性が改めて強調されています。

平成27年8月26日に中央教育審議会から報告された論点整理では、「幼児教育と小学校教育の接続に関しては、全ての教科等において幼児教育との接続を意識した教育課程を編成したり、幼児教育の特色を生かした総合的な指導方法を取り入れたりするなど、スタートカリキュラムの編成等を通じて、幼児教育との接続の充実や関係性の整理を図る必要がある」とされ、生活科については、「幼児教育との円滑な接続を図るスタートカリキュラムの中核となる教科として位置付けられるものであり、引き続きこの観点からの充実を図る」という方向性が示されました。

スタートカリキュラムを編成・実施することで、子どもは安心して小学校での生活をスタートすることができ、自信を持って成長していくことが期待されます。そして、主体的な学習の積み重ねが子どもの自立につながります。

小学校は、入学してくる子どもたちのこれまでの歩みを受け止め、その子の学びや育ちをつなぎ、「明日も学校に来たい！」という子どもの意欲をかき立ててほしいと思います。

【参考資料】

- ・初等教育資料 平成27年10月号 (H27.10 文部科学省)
- ・初等教育資料 平成26年12月号 (H26.12 文部科学省)
- ・スタートカリキュラムスタートブック (H27.1 文部科学省 国立教育政策研究所)
- ・幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)
(H22.11 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議)